

ナダ園芸造園協会)など海外の造園組織との交流

Expo, Venlo - The Netherlands 5 April to 7 October 2012

に地下足袋姿の植木職人が手入れを行い多くの来園者から注目を集めました。



昆明国際園芸博覧会の日本庭園（写真：都市緑化機構）



伝統的な職人姿でパフォーマンス（写真：箱根植木）フロリアード2002の日本庭園入り口

フロリアードに出展された日本庭園では、ハーグ・ズータメア（1992年）で金賞に輝き、ハールレマミー（2002）では、屋外展示1位、優秀栄誉賞を受賞しました。翌年ドイツのロストックで開催されたIGAではオランダで使用した資材を活用して庭造りが行われ、竹取物語をテーマに日本の文化や自然観を紹介し、金賞を受賞しました。

このように国際園芸博覧会には多くの日本庭園が展出され、日本の伝統的な造園技術を紹介する場となり、多くの日本庭園作庭と管理には日造協の会員が深く関わっているのです。



■フロリアード2012の概要

フロリアード2012はドイツ国境に近いオランダ南部の町Venlo（フェンロー）で開催されています。

正式名称：2012年フェンロー国際園芸博覧会（フロリアード2012）

Floriade 2012 World Horticultural Expo, Venlo - The Netherlands

テーマ：自然と調和する暮らし

“Be part of the theatre in nature, get closer to the quality of life”

開催期間：2012/4/5～10/7日 10:00～19:00
(6/21～9/2は～20:00)

開催場所：オランダ王国フェンロー市

会場規模：66ha

参加予定国：40ヶ国程度、

入場者数：200万人（開催目標）

入场料：25ユーロ、4歳～12歳：12.50ユーロ

6ヶ月の開催期間で入場目標が200万人というものは日本の感覚ではずいぶん少ないようですが、周辺の歴史ある街や自然をゆっくり楽しんでもらおうというパッケージも用意されていて、周辺への緑化推進と観光促進が期待されています。



■フロリアード2012の日本出展

今回のフロリアードには、日本国政府屋内展示と埼玉県川口市の日本庭園が展出され、世界に誇る日本の園芸、造園文化を紹介しています。

日本国政府出展は、屋内展示会場Villa Flora 2階の約250平方メートルの出展ブースに、日本の花きや園芸文化について紹介しており、主な行事としてオープニングセレモニー（4月）、ジャパンデー（8月）クロージングセレモニー（10月）の他、日替わり、週替わりでさまざまな花と緑のパフォーマンスが行われます。



オープニング準備の整った日本ブース

フロリアード2012オフィシャルオープニングでは、オランダ王国ベアトリクス女王陛下が日本ブースを訪問され関係者とお会いになられました。

4月5日の屋内出展オープニングセレモニーには、在オランダ大使館関係者、国土交通省 小林審議官を

はじめとする日本国政府関係者、AIPHのFaber会長と和田副会長や出展されている春日灯籠を無償で貸与していただいたオランダ人骨董収集家Ger夫妻も出席して執り行われました。

一般枠での出展となる川口市の庭園は1982年に日本から唯一の参加として最高賞を受賞して以来今回で4回目の出展となり、植木の里である安行を中心とした緑化産業に関わる若手の方たちが実行委員会を組織し、植物材料、石材など造園資材を日本から送り、現地で3週間にわたり作庭を行いオープンの20日前には完成していました。



茶庭のしつらえ

7月5日から11日には、フロリアードによる都市緑化推進効果や環境先進都市などを視察して新たな造園のビジネスチャンスを探るツアーも企画していますので多くの方々のご参加をお待ちしています。

■Floriade2012と日造協のかかわり

今回のフロリアードでは、伝統的な造園技法のファンや理解者をつくるために、日本政府屋内出展ブースと川口市屋外日本庭園で、日本庭園や造園技法への興味を喚起し理解を広げるための「解説型」と、伝統的な庭園文化を紹介し、多様な造園技法を楽しんでもらうための「参加・体験型」の2つの方法で実施される講座が企画されました。日造協国際委員会から3名の講師を派遣し、オープニング前に展示庭園の製作監修と解説内容のまとめや映像の提供と講座の企画や準備を行い、オープニングイベントでは作務衣や半纏の衣装も決めてパフォーマンスをしました。当初は、日本語の解説を来場者の様子により英訳、オランダ語訳をする予定でしたが、結果的には通訳時間節約のため講師が英語で解説を行い、必要に応じて通訳をすることとなりました。

講座No	講座内容	講師
講座-I	日本庭園の歴史、名園の紹介	スライドショー 野村
講座-II	屋内展示庭園の解説	施設解説 野村・松本
講座-III	屋外展示庭園の解説	庭園構成、施設解説 野村・松本
講座-IV	庭園技術の体験	関守石飾り結び 秋田・松本

4月5日～7日のオープニングイベントには多くの方が訪れましたが、中にはデンハーグのクリンゲンダール日本庭園を管理しているグループの聴講もあり、松の手入れ方法などについて細かい質問が寄せられました。



屋内日本ブースでの庭園解説

屋外庭園では入り口付近で興味のある方や少人数のグループに対して解説を行い、最後に茶庭に誘導して関守石の飾り結び体験へ誘導する方法としました。

関守石の意味について質問をすると、ほとんどがわからないという答えでしたが、石のお金？と聞いたユニークな方もいました。

飾り結びの体験コーナーは盛況で、担当の秋田、松本両講師の段取り、手順もスムーズで、通訳の広瀬さん、鈴木さんも結びができるようになり、説明がよりわかりやすくなりました。



庭園解説と関守石飾り結び体験

*講師のつぶやき

時間も限られているので、前もって下準備をしておき、最後の「四つ畳」だけを体験してもらうような形をとりました。

第1回目は、初めて手順をみてもらい来場者に後からやってもらおうと思いましたが、言葉の壁もあり、なかなか上手くいきませんでしたが、2回目からは、来場者と共に「四つ畳」を結んでいきました。

中には、結び方を知っている人もいて「キングクラ

ウンノット」と結び方の名前を教えてくれました。

組み終わった「関守石」は持ち帰り自由でしたので、「重いからいらない」という人や「部屋に飾る」「夫婦げんかをした時に部屋に入れないように使う」「一人になりたい時に使う」などいろいろと使用目的を言いながら喜んで持っていました。

初めはどうなるかと不安でしたが、通訳の方と一緒にやっていただけたので無事3日間の役目を果たせたと思います。（秋田講師）



関守石をお土産に持って帰る人も多い



日本ブーススタッフの若者たち

今日日造協で担当させていただいたイベントは大成功でした。

ちょっと話題はそれますが、屋内日本ブースで若者たちが活躍しています。「研修生」として日本から3箇月もしくは6箇月来ている若者です。花卉業界に携わる生産・流通・小売・生花・盆栽・造園など、広いジャンルから公募を勝ち取って来ています。市内のアパートで共同生活を営みながら会場のサポートをしています。

その効果を推察すると

- ・同世代の業種の違う仲間との情報交換
- ・最先端の園芸情報の入手
- ・来場する日本人に対する営業
- ・帰国後の話題づくり
- ・会場内他国の技術者との交流
- ・新しいビジネスモデルのヒント

若い子には旅をさせろといいますが、まさにこれぞ！って感じです。

20代で行った一造会の海外研修を思い出します。あの経験が今に生きています。

日本ブースで研修生に会ったら、激励の一言を！（松本講師）

■造園技術の海外展開へむけて

日本の伝統文化と造園技術の集大成とも言える日本庭園は、盆栽とともに海外で関心の高いものとなっていますが、風土や文化の違う国で生まれ育った人々に、日本庭園の本質や日本独特の剪定技術までを理解してもらうことはやはり少々難しいことかもしれません。

四季の移ろいや多様な自然の風景を巧みに取り入れて発達してきた日本の庭園技術は、日本人が遺伝子として持っている自然感を具現化したものともいえ、上古から長い時間をかけ時代背景を映しながら変遷してきたものです。

日本にある庭園を表面的に作るのではなく、現地の気候や風土にあった資材の選定とともに、その場の景色や背景を巧みに取り入れおさめることが海外での日本庭園作りには特に必要なことだと考えられます。

日本庭園は完成してからも、独特の手入れによって時間をかけながら徐々に熟成させる空間であり、そのための技術や技能の伝承も欠かすことができません。

前述したように海外には多くの日本庭園がありますが、良好な状態を保っているものは非常に少なく、適切な管理が必要とされています。

アメリカ合衆国オレゴン州のポートランド日本庭園を中心に、北アメリカの日本庭園管理に関する情報共有ネットワークの構築が始まっていますが、日本庭園に限らず海外プロジェクトや都市緑化の場に日本の造園技術、管理技術を発揮することが新たな造園産業のビジネスチャンスにつながると期待され、積極的にかかりを持つことが大切なのではないでしょうか。

今後多くの国で開催が予定されている国際園芸博覧会が、日本の誇る庭園文化を世界中の人々に紹介し、日本庭園の魅力と日本の造園技術のすばらしさを伝える場となることを願っています。

副会長・国際委員長 和田新也、国際委員 松本朗（富士植木）、講師 秋田昌之（箱根植木）、技術調査部長 野村徹郎



AIPH(国際園芸家協会)、CNLA(カナダ園芸造園協会)



Floriade 2012 World Horticultural

■日造協の国際交流

日造協は、創立後間もない頃より海外における都市公園や環境緑化の事例調査や視察を行うとともに、AIPH(国際園芸家協会)、ELCA(ヨーロッパ造園建設協会)、IFLA(国際造園家協会)など諸外国の造園緑化に関する団体との交流を図っており、日本の造園文化と技術を世界に発信するだけでなく、世界各国からの問い合わせや日本での活動の相談などにも対応するとともに、海外でのプロジェクトなど様々な情報も提供しています。

今回の海外特集では、日造協の国際的な活動の一端を4月5日からオランダで開催されている国際園芸博覧会“Floriade2012(フロリアード)”を中心にご紹介します。



■国際園芸博覧会とフロリアード

国際園芸博覧会は、1960年にオランダのロッテルダムで初めて開催されて以来、ヨーロッパ各地で定期的に開催されています。

国際園芸博覧会

- ・真の国際園芸博覧会の価値を高め、博覧会が過度に開催されることを防ぎその成功を保証する。
- ・園芸のあらゆる分野における生産性を向上させ、園芸製品の利用を促進し、世間一般の園芸製品に対する評価を高める。

- ・園芸職の世界的協力を増進し、園芸製品、園芸事業の自由な取り引きを促進する。

という目的で開催規則が作られ世界各地で開催されており、国内外の園芸博覧会開催地の多くは公園としての利用や地域開発における緑のインフラとして活用され博覧会の社会的な効果を持続しています。

国際園芸博覧会は、その規模や期間によってA1～B2まで次のように分類されています。

分類	名称	開催頻度	開催期間	国際参加	最低博覧会 最低面積
A 1	大國際博覧会 パリの博覧会 国際事務局 (BIE)に承認 が必要	1回/年以下 10年に1回/1 ヵ月以下	最低3ヵ月 最高6ヵ月	最少10ヵ国	50ha
A 2	国際園芸博覧会	2回/年間最高	最低8日間 最高20日間	最少6ヵ国	1.5ha うち最低200 m ² は、外国からの 参加者向け
B 1	国際参加のある 園芸博覧会 —長期—	1回以下/毎年	最低3ヵ月 最高6ヵ月		25ha 最低3%は、 外国からの参 加者向け
B 2	国際参加のある 園芸博覧会 —短期—	2回/年以下	最低8日間 最高20日間		0.6ha 最低600m ² は、 外国からの参 加者向け

海外の国際園芸博覧会に出展された日本庭園のはほとんどはA1クラスの博覧会となっています。

ヨーロッパから始まった国際園芸博覧会は、アジアでは1990年の大阪「国際花と緑の博覧会」が初めての

開催となり、以後中国各地(雲南省昆明市、遼寧省瀋陽市、陝西省西安市)、兵庫県淡路島(淡路花博)、静岡県浜松市(浜名湖花博パシフィックフローラ、浜名湖フローラ&ガーデンショー)、タイ王国チェンマイ(ローヤルフローラ・ラチャブルック)、韓国(フロリトリピア)、台湾(台北世界花博覧会)などで開催されています。

国際園芸博覧会の中でも特に歴史のあるフロリアードは、10年に一度オランダで開催されるもので、AIPH(国際園芸家協会)の認証を得て開催されるA1クラスの国際大博覧会で、今回で6回目の開催となります。

また、ドイツでも10年ごとにIGAが開催されており、前回2003年のRostock会場ではフロリアード2002に出演された日本庭園の一部施設が移設されて出展されました。



今までに開催された主な国際園芸博覧会とこれからの開催予定を次の表にまとめました。

国際園芸博覧会の開催歴

開催年	都 市	名 称	クラス
1960 オランダ	Rotterdam	Floriade	A1
1963 ドイツ	Hamburg	IGA	A1
1964 オーストリア	Vienna	—	A1
1969 フランス	Paris	—	A1
1972 オランダ	Amsterdam	Floriade	A1
1973 ドイツ	Hamburg	IGA	A1
1974 オーストリア	Vienna	—	A1
1980 カナダ	Montreal	—	A1
1982 オランダ	Amsterdam	Floriade	A1
1983 ドイツ	Munich	IGA	A1
1984 英国	Liverpool	International Garden Festival	A1
1990 日本	大阪	国際花と緑の博覧会	A1
1992 オランダ	Zoetermeer	Floriade	A1
1993 ドイツ	Stuttgart	IGA	A1
1999 中国	昆明	International Garden Festival	A1
2002 オランダ	Haarlemmermeer-Amsterdam	Floriade	A1
2003 ドイツ	Rostock	IGA	A1
2004 日本	静岡	パシフィックフローラ	A2/B1
2004 フランス	Nantes	Floraliées Nantes 2004	A2
2005 フランス	Dijon	Florissimo	B2
2005 ドイツ	Munich	BUGA	B1
2006 タイ国	Chiang Mai	Royal Flora Ratchaphruek	A1
2006 中国	瀋陽	Shenyang	A2/B1
2006 イタリア	Genova	Euroflora	A2
2007 ドイツ	Gera (G)	BUGA	B1
2008 カナダ	Quebec	Les Jardins des Floraliées int.	B1
2008 カナダ	Quebec	Quebec en Fleurs int.	B2
2009 ドイツ	Schwerin	Buga	B1
2009 日本	静岡	浜名湖フローラ&ガーデンショー	B2
2009 韓国	Kkotji	Korea Floritopia	A2
2010 台湾	Taipei	Taipei International Garden and Horticulture Exposition	A2/B1
2011 中国	西安	International Horticultural Exhibition	A2/B1
2011 ドイツ	Koblenz	Buga	B1
2011 イタリア	Genua	Euroflora	A2
2011・12 タイ国	Chiang Mai	Royal Flora Ratchaphruek	A2/B1
2012 オランダ	Venlo	Floriade 2012	A1

来年2013以降に開催予定の国際園芸博覧会

2013 韓国	Suncheon	Suncheon Bay International Garden Expo 2013	A2/B1
2014 中国	Qingdao	Qingdao International Horticultural Exhibition 2014	A2/B1
2016 トルコ	Antalya	Expo Antalya	A1
2016 中国	Tangshan	Tangshan International Horticultural Exposition 2016	A2/B1
2017 ドイツ		IGA	A1

■AIPHと日造協

AIPHとその承認する園芸博覧会については、以前にも本誌に説明が掲載されていましたが、読まなかつた方や、お忘れの方も多いと思いますので、簡単にご説明します。

AIPHは1948年に国を超えた協力の必要性を認識したヨーロッパ各国の園芸家団体によってスイス、チューリッヒにて結成されました。創設メンバーは、スイス、西ドイツ、オランダ等の10か国の団体でした。

AIPHの大きな特徴の一つは、民間団体ではありませんが、国際園芸博覧会の認証団体であるということです。万国博覧会や国際博覧会を登録・認定する国際機関としてはBIE(博覧会国際事務局)がありますが、国際博覧会条約第4条B2項には、国際園芸博覧会はAIPHがA1クラスとして承認したものとBIEが認定する旨、明記されています。簡単に言いますと、国際園芸博覧会については、AIPHの承認がないとBIEの認定がもらえないという仕組みになっています。

日造協は、大阪花と緑の博覧会(1990年)誘致活動を機に1985年アジアで初のAIPH会員となりました。当初日本は大阪花博開催のためだけの入会ではないかと懐疑的だったヨーロッパのメンバーもありましたが、その後の日造協の継続的活動により、現在ではAIPHの中心的メンバーとして認識されています。来場者数2300万人という園芸博としては空前絶後の入場者を得た大阪花博以来、BIE認定なしのクラスとしては最大級のA2/B1クラスの園芸博として開催された淡路ジャパンフローラ2000、浜名湖パシフィックフローラ2004の大成功は、アジアでの園芸博ブームの火付け役となり、現在のアジアにおける園芸博ラッシュとも言うべき状況を作り出しました。

なお、国際園芸博覧会を開催するためには、開催国にAIPH会員機関が存在することと会員機関経由の申請が規則となっており、日本での開催にはAIPHに加盟している日造協がその窓口となっています。

日本の窓口として1985年にAIPHに加盟して以来、国際園芸博覧会の招請や開催の協力に努めるとともに、アジア地区の代表ともなっており、国際委員会としては国際園芸博開催のご希望があれば、しっかりとサポート活動を行っていきたいと考えておりますので、ご質問等ございましたら、ご遠慮なくお問い合わせください。

AIPHではGreen City活動等博覧会以外でも造園分野の活動を強めつつあります。

Green Cityはその名のとおり都市に緑を増やすための活動で、各国の緑の都市表彰制度やグリーンフォーラムの開催などにより都市緑化の啓発、促進を目指しています。

昨年11月にはAIPHメンバーでもあるCNLA(カナダ園芸造園協会)により大西洋側のニューファンドランド島でAtlantic Green Forumが開催され、日本の都市緑化制度や伝統的日本庭園と日本の風土や文化について日造協に講演依頼がありカナダの造園業界との交流を深めることができました。CNLAの組織や運営の方法は日本の造園産業界にとって参考となることが多くみられ、より一層の情報交換を継続したいと思います。



■海外の日本庭園と国際博覧会

日本造園学会の調査によると海外で一般に公開されている日本庭園は450あまりと報告されています。

国際的な博覧会に日本庭園が出展されたのは、1863(慶應3)年のパリ万国博が最初とされていますが、日本が国として参加したものは1873年(明治6年)のウィーン万国博覧会が初めてで純日本的な風俗を紹介したものが展示されています。日本庭園はその後も欧米各地で開催される博覧会の目玉出展物となり、貴族や富豪が自宅に日本庭園を造るようになったということです。

国際園芸博覧会では、大阪花博以前にも1984年に英国のリバプール国際園芸博覧会へ日本庭園が展出され、名誉大賞とラージゴールドメダル賞を受賞しています。



リバプール国際園芸博覧会の日本庭園(写真:都市緑化機構)

その後も1999年に中国初の国際園芸博覧会が、春城とも呼ばれる多くの植物のふるさとでもある雲南省の昆明で開催され、出展された日本庭園は総合部門で最優秀賞、部門別でも大賞、金賞を受賞し、2006年にタイ王国チェンマイで開催されたローヤルフローラには国交省、地方公共団体、緑関係団体で構成する共同実行委員会により日本庭園が出展され、会期中は半纏

筆者の勤務する株式会社プレック研究所は、昨年6月から、岩手県陸前高田市における震災復興計画に関わる一連の業務に従事している。「三陸の湘南」とも言われた陸前高田市は、今般の東日本大震災により、全国でも最大級の壊滅的な被害を受けた。

市の震災復興計画は昨年12月21日の市議会での議決を経て正式な計画となつた。その後、岩手県で初めて進んで来れたといふこととも、山積する膨大な津波復興拠点整備事業も盛り込んだ、復興整備計画が公表された。

このように、復興の方向性を定めるビジョンの段階から、個別具体的な事業化の段階に移行しつつあるのが現状である。これまで1年近くでようやくここまで進んで来たといふこととも、山積する膨大な事業を今後具体化させていくための多くの課題への心配・懸念が相半ばしている。

第一に雇用の問題がある。仮設住宅等により住ま

いの問題は何かクリアできているとしても、「何もしないことがないほどつらいものがない」という思ふしている市民もいらっしゃるのではないか。市主体の事業として、区画整理事務が2箇所、防災集団移転事業が他の学校等の公共施設再建等があり、国・県・民間

援する専門家数は、絶対的に不足している。防潮堤整備にかかると見られる可能性が高まる。

これまで造園学会では、復興支援に向けて各種の調査活動や取組みを行ってきた。近く「コンセプトブック」の発刊も予定されている。また国土交通省では、3月27日に「東日本大震災からの復興に係る公園緑地整備に関する技術的指針」を公表した。これまでの実地での復興へ向けての取組みにおいては、造園分野の専門家は非常に限定されていたのが実態で、陸前高田市においては協働する専門家、有識者、行政機関職員とも、そのほとんどが土木・建築等分野の方々で構成され、大変寂しい気持ちであった。

しかしながら、今後の事業化段階では、設計・施工・運営の各面で、我々の活躍の場が増大することとなる。被災地の土地利用は、津波防御のために台移転が必須であり、今後低地部に広大なオープンスペースが現出することが想定される。そのような土地の空間整備・活用に関する、デザイン・運営のあり方も大きな課題となつてこよう。

今こそ、造園分野からの震災復興への具体的提案、また事業への参画が大いに期待される。専門職員の関係者は、一丸となって震災復興における専門職能を發揮する場の創出に、力を尽くすべき時機ではな

いからである

